

「子どものネットコミュニケーションのあり方を探るワークショップ」に関する実践報告

A report of "Workshop on Pupils' communication on the Internet"

藤平 昌寿^{*1}

Masatoshi FUJIHIRA^{*1}

^{*1} 帝京大学とちぎサイエンスらいおん事務局

^{*1}Tochigi Science Lion office, Teikyo University

Email: fujipon@tochigi-lion.net

あらまし：昨今の情報通信機器・システムの急速な進歩により、子どものネットコミュニケーションの現況が年を追う毎に変化しており、知識を得ることや指導法に苦慮する教員や保護者は多い。栃木県内の教員・一般県民を対象にしたワークショップを実例とし、学校や地域に於いて、これらの問題解決に持続的に取り組むためのきっかけづくりとしての実践報告をする。

キーワード：情報リテラシー、情報モラル、教師教育、ネットコミュニケーション

1. はじめに

携帯電話（スマートフォン含む）の所持開始年齢の若年化などに代表される、子どもとネットを取り巻く環境は日々変化している。筆者は特定非営利活動法人eーとちぎの代表理事として情報リテラシー向上に関する活動もしており、栃木県との協働事業により啓蒙冊子も作成している⁽¹⁾。2014年12月に栃木県総合教育センターで開催された「情報モラル指導者研修」にてワークショップ(WS)を行う機会を得た。筆者は本ワークショップの設計と実践を行った。

2. ワークショップの構成

2.1 概要

今回は、情報モラル指導者研修の中の「演習・ワークショップ」の部として、60分が割り当てられた。この前後には講話や研究協議など、計5.5時間のカリキュラムが組まれている。参加者は65名。内訳は、小学校教員14名、中学校教員14名、高等学校教員22名、特別支援学校教員3名、PTA関係者3名、生涯教育関係者9名である。

2.2 前提と目的

参加者が困っているであろう前提とWS後の状態について、表1のように設定した。

表1 WSの前提と目的

参加者は、何に、どう行き詰っている？
・ネットいじめ等の問題に直面 ・ネットの進化についていけない ・指導法に困っている
参加者は、どうして良い体験ができていない？
・学ぶ時間や機会が少ない ・答えが定まらないケースが多い ・リアルな常識が通用しない

WS前は潜在化、WS後に発揮されている力とは？

・各々が事例や解決例を持っているはずなので、それらをシェアできる力。コミュニケーションの根本は、今も昔も変わらないという認識。

WS後の状態（目的）

・常に学ぼうとするモチベーション
・学校や地域に口コミしてくれる
・迅速で柔軟なルール化
（リアルルールがバーチャルでも適用）

2.3 設計

前項の目的を達成するために、4～5名のグループ分けをし、表2のような設計を行った。

表2 WSの構成と流れ

プレ・プログラム	
10分	自分が学生時代と今の子供たちのそれぞれの、連絡・コミュニケーション方法（遊ぶ約束・雑談・自己紹介など）を挙げる。→グループ内発表。（自己紹介も）
コア・プログラム1	
10分	各々の課題や問題点を書き出す。→グループ内で発表。
リフレクション1	
5分	自分が知らなかったこと／分からないことを出す。→グループ内で発表。
コア・プログラム2	
20分	出されている課題について、解決例があれば、付箋で出し合う。解決例がないものについては、全体や個別にアドバイス。
リフレクション2	
10分	「自分が新たに知ったこと」「これからやってみようと思うこと」を書き出す。

3. ワークショップの実施

3.1 イントロダクション

導入として、「子どもの成長に伴うコミュニケーション範囲（監督範囲）と現状とのギャップ」「子どもとネットの関係の基本的示唆を表す標語⁽²⁾」をスライドで説明。

3.2 プレ・プログラム

世代間の連絡方法の違いを顕在化させると共に、その目的自体（遊びなど）は大して違いが無いことを、自己紹介を含めて共有する。

3.3 コア・プログラム 1, リフレクション 1

参加者各々が抱えている課題を書き出して発表し、新たに知ったことなどを共有することにより、自分の常識が必ずしも他人に当てはまらないことを再認識する。

3.4 コア・プログラム 2, リフレクション 2

出された課題について、他の参加者が解決法やヒントを持っていれば付箋で共有していく。更に新たに得たことやこれからやってみたいことを発表することにより、今後のモチベーション喚起に繋げる。

3.5 解説

各グループで出た課題の内、複数で出たものなどをピックアップして、講師がまとめてフォロー（時間があればグループ毎の発表が良い）。

また、以下の資料をスライドで紹介し、課題と関連性の高い部分を中心に補足解説した。

- ・ SNS の利用有無と匿名・実名利用の比率⁽³⁾
- ・ Twitter の実名・匿名利用⁽³⁾
- ・ SNS の実名公開における抵抗感⁽³⁾
- ・ SNS における他者に見られることへの認識⁽³⁾
- ・ リテラシー教育の有無⁽³⁾
- ・ 小中高の児童・青少年の情報通信端末の利用率⁽⁴⁾
- ・ 各情報通信端末を子供が小学校入学前に利用開始した割合⁽⁴⁾
- ・ 子供が将来 ICT 利活用能力を身につけるために必要な事項と家庭における指導状況⁽⁴⁾
- ・ ICT についての子どもへの指導内容（学年別）⁽⁴⁾
- ・ 子どもと比較した保護者の ICT に係る知識⁽⁴⁾

4. 事後アンケートと考察

主催の栃木県総合教育センターで事後アンケートを実施した。研修全体に関する記述式アンケートのため、当 WS に関する記述を抽出し、表 3 の通りにまとめた。

回答者数の半数以上(G)に、目的である定常的な学習や周囲への啓蒙などを実施していきたいという回答があり、短時間での WS としては効果的な数値である。

否定的感想についても、時間的制約等による情報量不足についての指摘であったので、設定により解決できるものであると考えられる。

本 WS を通じて、参加者の考え方や言動に変容を促し、情報モラルに関して、子どもや保護者・教員等の抱える諸問題の解決に定常的に取り組む意欲を喚起するのが今回の目的であるため、必ずしも情報を獲得できたから正解というわけではなく、情報をシェアしやすい環境を維持することが必要であることを、再確認できた。

表 3 アンケート結果概要

A. 参加者数 65 名 B. 回答者数 55 名 (回答率 B/A= 84.6%) C. 記述回答者数 42 名 (回答率 C/A= 64.6%) ※記述設問に回答した参加者
本 WS について D. 記述回答者数 32 名 E. 肯定的感想 32 名 (回答率 E/D= 100.0%) F. 否定的感想 2 名 (回答率 F/D= 6.3%) ※E,F は複数抽出あり
G. 目的に達した、或いは近い、と考えられる回答数 18 名 (達成率 G/D= 56.3%) ※目的に関する主な記述（抜粋） ・ 自分の学校の現状を知りたいと思った。 ・ 家庭とのギャップ、職員間のギャップをどう埋めていけるかが重要であると再認識した。 ・ 情報教育主任という立場から、研修会や保護者に向けての啓発の場を考えて実践していきたいと思った。 ・ 新しい SNS がどんどん出てきており、親や教員がそれらの情報について知ることからスタートだと感じた。 ・ 学校・保護者間、地域・保護者間、保護者・子ども間、それぞれのギャップをいかに埋められるか、一つの目標を持てることが大切だと学んだ。 ・ 子どもだけでなく、我々、そして保護者が一緒に学ぶべき。指導には限界があるかもしれないが、それでも指導し続けることが大切。

参考文献

- (1) 特定非営利活動法人 eーとちぎ編: “ケータイ安全安心大作戦! 2014” (2014)
- (2) 栃木県青少年のための良い環境づくり実行委員会: “ケータイ・ネットに関する川柳・標語” (2009)
- (3) 総務省: “インターネットリテラシーに関する利用者意識”, 平成 26 年版情報通信白書, pp.292-6 (2014)
- (4) 総務省: “インターネット接続機器による認識差”, 平成 26 年版情報通信白書, pp.296-8 (2014)